
自然主義国家の構想第 2 報告

第零議長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自然主義国家の構想第2報告

【Nコード】

N6739S

【作者名】

第零議長

【あらすじ】

前作「自然主義国家の構想第一報告」を、もつと読みやすく、わかりやすく、例や比喻を交えて書き直した、人類を救うための文章。

「初めに」

まず、これだけは言っておく。これから話す内容については、次のことを絶対的な優先事項とする。

・人類の半永久的な、かつある程度の人口を保った存続。

私が一番問題視しているのは、現代人の、現代人による、現代人のための開発がいかに危険で、いかほど深刻化しているかを知らない、知ろうとしない、知りたくない人間が満ち満ちていることである。

もしくは、知っていても、「別に私たちの世代で おわりは来ないからどうでもいいもん！」とかいう人間である。私はそういう人に会えば確実に憤慨し、無責任極まりないと思う。もしそういう人に会ったら、哀れな顔を浮かべて「いいや、君たちの世代もちゃんと地獄を見るのだよ。」と言ってほしい。彼らは自分たちの孫から、「じいじ（ばあば）は、なんでうちのことを考えなかったの？じいじ（ばあば）、大っきらい！」といわれる運命なのだ。まあ、それだけで済めばこれほどよいことはないのだが・・・（きつと異常気象や海面上昇が彼らを、私たちを襲う）。

これよりも酷いのが、「エコカー補助金」だの、「環境に配慮した製品です」などという文句を並べて、顧客に良い印象を与えることで商品を買わせる、という手口である。気づいてもらいたいの、彼らは自然破壊や環境保護に関して、顧客を洗脳、ブレインウォッシュしているのだ。こういう社会の行動が、先にあげたような人間を大量発生させているといっても過言ではない。

どちらの場合でも、彼らには、自分たちが生態系を、すなわち人類の基盤を根本から壊そうとしている張本人だということを自覚してほしい。そのためには、私のような人間が、何らかの大きなシヨ

ツクを彼らに与えることも必要だろう。その面で、私のような人間が後世の人類に対して負う責任は計り知れないほど重い。

では、この文章の読者の方々、これから書かれていることを読むときには、強い衝撃に警戒してください。内容はズバリ、「自然主義国家の建設」。もう衝撃を感じた人もいるかもしれない。すいすい頭の中に入ってくるように書いたつもり（つまり強いのが来る）なので、受け流さないでくださいね（笑）。

「なぜ自然主義国家の建設なのか」

なぜ？上のテーマを読んでそう思った方、積極的ですな。「初めに」で、絶対的優先事項として、「人類の半永久的な、かつある程度の人口を保った存続」としました。この絶対的優先事項がなかったら、人間何もできませんからねえ。

ここは消去法で考えていこう。

経済成長は捨てよ！滅びたくなければ。

まず、資本主義（＝競争社会）は絶対無理。競争社会にすることで、どんどん自然がむしばまれて行っているのは承知のとおりです。これは、自分が立っている生態系という建物の柱の全てに、ダイナマイトを仕掛けて、爆発させようとしているのですよ。足の骨折っちゃったあ、では済みません。全身を打撲、それか悪ければ頭から落ちて即死ですね。保険に入っているって言い張る人（いないと思いますが）、「地球環境保険株式会社」なんてありませんからね、多分。

例えばこのくらいにして、自社の発展のために暴走した企業が、どんどん商品を出そうと、その商品の原料を得るため、森を破壊し、原料製造工場を空いた土地に建て、さらに高速道路まで立て、ああ儲かった、儲かった。そしてなぜか、もっと儲けよう、という発想に行ってしまうのですな。さあ頭の中は金でいっぱいだ。もっと

儲けるために、さらに開発を続け、それが繰り返されるのです。

森林は、「打ち出の小槌」ではありませんから、いずれは全滅します。そうなれば土地は痩せ果て、食料生産ガタ落ち、結果、地獄としか言いようのない飢餓の時代が、終わりが見えない災厄の時代が始まるのです。これは絶対的優先事項に当てはまりませんね。

じゃあ社会主義はどうか。一見するとよさそうなのですが、実は意外な落とし穴があるのです。まずは思想の目的から。社会主義の目的は、「万人平等」です。おつ、社会主義って少しはいけるかも、って私は最初に思いました。しかし、「万人平等」であればいいんです。つまり、国民全員が貧しい農民でも、国民全員がお金に多少余裕のあるサラリーマンでもいいのです。あれ、もし国民全員がお金持ちになれば、当然そこには開発があります。例えばソ連では「自然改造計画」なんて言う政策もやっていましたね。あれは結果的に、世界第四の面積を誇ったアラル海の全水量の七割近くを消滅させました。もちろんこの「ソ連式社会主義」は絶対的優先事項には当てはまらないのです。また、ソ連のレーニンの頃の時代くらいが良かったもので、ほかのたいていの社会主義国は、独裁者の欲望のための制度になり、崩壊していきました。それに、その社会主義体制が崩壊すれば、たいていは資本主義の国へと生まれ変わるのです。人々は、なぜか資本主義に、ブラックホールみたいに吸い込まれていくのでしょねえ。一線を越えたら、戻ってこられないのに……。

ならば毛沢東思想はどうか。文化大革命の時期は、酷い弾圧もあったようですが、当時を知る国民は「あの時は幸せだったな」という人もいるそうで、最初私も「いいかな」とは思いました。しかし、毛沢東思想の目的は、「中華人民共和国の発展」なんです。「発展」されたら困るのですねえ。

結局社会主義もだめという風になりますが、例外があります。「エコ社会主義」というものがあるのです！これは私の考える自然主

義国家とかなり似ている。二本の平行線のようにかなり似ている。しかし少し私の理論とは異なるので、ここでは述べません。

これで、資本主義と社会主義は、結果的に人類を滅ぼしてしまうということになりました。ところで、この二つの、ぜんぜん違うような思想ですが、実は同根なのです。えー！はい。同根です。この二つの思想は、もともとは人権思想から来たものなのです。この「人権思想」、実は自然主義を考える上では厄介者なのです。これについては、次の章で詳しいことを話すようにしましょう。

では話を戻して、資本主義と社会主義、この二つはどちらも「文明の発達」もしくは「経済成長」が目標なのです。これでは、文明が発達するのに伴って発生する生態系の破壊は避けられません。しかも、現在の文明のレベルにおいても、環境破壊はすさまじい勢いで進んでいるのです！これはもはや「退化」が必要なのかも知れません。え、でも、100%リサイクルの社会にすればいいじゃないか、そういう人もいるでしょうが、一人っ子政策や社会保障の停止でもしなければ、人口は増え続けるので、新たに開発がおこなわれるのです。結果、資本主義と社会主義（経済成長）は、次世代の国家の政治体制としてはふさわしくないと思います。

一般国民の限界

さて、資本主義と社会主義という、20世紀の2つの大きな政治思想が消されました。次は何が消えるのでしょうか。なんと、「民主主義」なのだ。ただし条件付きで…。

ふざけるな、民主主義がなぜ消える！そう思う人が大多数でしょう。しかしご安心を。民主主義が消えるべきなのは、「国民の意識と地球の現状との相違」がなくなるまでの間だけです。これが条件の一つ。

では説明しましょう。もしこれからずっと一般国民による民主主義

が続いたとすれば、多くの国民は、今まで通り、社会保障（生活保障）をしっかりと、経済成長を推し進め、自国の発展のために尽くす人間を、自分たちの代表として選ぶでしょう。こうなれば、前の節で述べたことになると思われます。結局、「民主主義が人類を滅ぼす」という事態になりかねないのです（これはあくまで私の妄想ですが）。ま、「国民の意識と地球の現状との相違」がなくなればいいですよ。そうすれば、皆が環境のことを考えた政治を行うでしょうからね、多分。

結局何が重要なのか

まさか民主主義が消えるとは思わなかったでしょう、皆さん。強い衝撃に警戒するのはここでいったんやめにして、今までのまとめを試みましょう。

まず、資本主義と社会主義のところでは、ここでは、「文明の発達」や「経済成長」を目的にすべきではない、ということになりました。しかも、現在の段階でも環境破壊はどんどん加速しているので、「退化」が必要なのではないか、と私は考えます。いえ、ひょっとしたら、「退化」することが「進化」なのかもしれません。

次に、民主主義の一時撤廃のところでは、「国民の意識と地球の現状との相違」を解消することが重要だ、と説きました。つまり、地球上の全人類に、我々の母体たる生態系がいかにものなのか、そして発展の先には地獄があるのだ、という意識を植え付ける必要があるのです。民主主義という高次すぎる態勢はそのあとです。

つまりは、文明を「退化」させ、民主主義を「停止」し、その間に国民、いや全世界の人類に地球の現状を説く、ということが必要だ、私の結論はそうなり、これを、資本主義や社会主義になぞらえて「自然主義（ecositytemacy、直訳すれば、生態系主義）」と命名しました。

では実際に、その「自然主義」とやらがどういうものなのか、実際に見てみましょう。また、一部常識から逸脱している部分がありますので、ご注意ください。

ⅡⅡ 自然主義国家ⅡⅡ

まずは、「自然主義」という名の根拠から。

人類は主権者じゃない？

そうなのです。人類は主権を持っていないのです。はあつ、じゃあ誰が持っているのか？ズバリ「自然」です。それこそが「自然主義」という名称になったゆえんなのです。理由は、前章であげたとおり、人類が政治を行えば、大変な事態になるからです！。

おいおい、自然がどうやって政治をするのかよ、はっはっは。実は、自然が政治を行うともちろん、自然（生態系）は政治をすることはできません。なので、代わりに「自然府」という組織が、自然（以後、主権者とする）の代理として主権を行使するのです。日本の政治でたとえるならば、内閣と国会を合わせたようなものです。

自然府はとても大きな権限を持っており、予算の編成及び承認、法度（今でいう法律）の発布及び施行、外交全般など様々です。しかし、これらの政治活動全てを行う際は、絶対的優先事項を実行するために、常に主権者の立場に立つことが求められます。もちろん、前章で述べたように、文明の退化と、環境教育を心がけるでしょう。さて、その自然府、先に述べたように民主主義の観点から国民の選挙で議員が選ばれる、なんて言うことはもちろんありません。ではどういう仕組みで動くのか、説明しましょう。

あつ、独裁ではないのでご安心を。

自然府のトップは、「最高責任者」と呼ばれる「三人の」人たちです。えっ、三人？そうなんです。政府一のお偉いさんは三人いるのです。これには、最高責任者が独裁的になるのを防ぎ、さらに三

人分の意見を交えて政治を行えるという効果があります。最高責任者の次のお偉いさんは、「副責任者」という「六人の」人たちです。また複数形になりましたが、この理由についてはのちほど。基本的には、最高責任者と副責任者の計九人が、国の立法及び行政を行います。三権分立など完全に無視されていますが、これで大丈夫な理由ものちほど（のちほどって多いな）。この9人からなる、自然府の中にある機関を「枢要院」と呼んでいます。この枢要院が、国政を担う事実上の主権者となります。

その下で働くのは、「自然府官吏」という、政治の実務を担う、日本で言えば「国家公務員」のような存在です。自然府の政治は、この二者で行われます。

では、枢要院と自然府官吏の人間は、どのようにして選ばれるのか。もちろん選挙じゃありませんよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6739s/>

自然主義国家の構想第2報告

2011年5月8日17時25分発行